洋装の日本史

刑部芳則
Osakabe Yoshinori

インターナショナル新書 112

目次

序章　9

第一章　幕末の海外渡航と洋服との出会い　13

洋服は鬼や悪魔が着るもの／幕府の遣米使節団／幕府の遣蘭留学生／慶応四年の海外渡航

外国と戦うための軍服　洋式調練の事始め／和洋折衷の軍服／幕府が軍服として認める「筒袖」／農民の仕事着／洋式軍服に対する抑止力の限界／徳川慶喜も洋式軍服を着る

外国人のための洋服店　洋服仕立て業の発祥地は神戸？／慶応三年の洋服仕立て状況／洋服の発祥地は横浜

廃藩置県と服装改革　和装ばかりの服制論議／「非常並旅行服」と陸海軍の軍服／廃藩置県からはじまる洋装史／家政学の服飾史研究の問題点／服制変革の内勅／『日本洋服史』は注意すべき文献／政府閣僚たちの髷落とし／岩倉使節団と洋服／岩倉具視も洋服を着る／「洋服記念日」は文官大礼服・非役有位大礼服・小礼服の制定日／ドラマの「征韓論争」は誤ったイメージ

廃藩置県まで洋服を着ることはなかった【この時代の服装発展段階論の見方①】

第二章　欧化政策の表と裏

男性が洋服を着る社会　仕事着としての洋服／学生服の二つの系統　―学習院と東京大学の制服―

女性の洋装化のはじまり　女性の洋服は対象外／男袴を穿く女学生への批判／鹿鳴館時代とはなにか／伊藤博文と井上馨／谷干城の苦言／大蔵省印刷局の女性職員の服装／皇后の洋装化／ドイツへの礼服注文／「婦女服制のことに付て皇后陛下思食書」／東京女子師範学校での洋服着用／華族女学校での和服と洋服／華麗な礼服は高額で着心地が悪い／女学校で洋服を着る限界／ドレスメーカー／村上信彦の誤った負の評価

女性洋装化の目的達成と再検討【この時代の服装発展段階論の見方②】

第三章　衣服改良運動

国粋主義に求める誤り／明治二〇年以降も欧化政策による洋装は継続された／洋服着用の是非を問う渡辺鼎／吉岡哲太郎の「女服論」／ベルツの女子服装に対する賛否両論／着物と袴は洋服の代用服／下田歌子と袴／弘田長の改良服／高木兼寛の女子服装改良意見／山根正次の改良服／野中千代子の改良服案と実践手段／日本赤十字社の看護服／堺利彦の「女服改良の説」／高等女学校の海老茶袴／女子生徒と女性労働者に広がる洋服の

代用服／石垣綾子の幼少期の思い出／板垣退助や武家華族も論じる風俗改良／高等女学校を卒業すると袴は穿かない
女子生徒の服装にとどまった衣服改良運動【この時代の服装発展段階論の見方③】

第四章 服装改善運動

永井荷風が見た都会の服装／東京の田舎の服装／改良服の発表と実践／第一次世界大戦の影響／服装改善運動と展覧会／山脇房子と洋式制服／改良服に対する評価／服装改善の方針／「新しき女」の洋服姿／吉岡彌生が実践した女医の洋服／洋服を着る東京の小学生／セーラー服の登場／成田順の洋装事始め／「衣袴式」の改良服から洋服への方針転換／女性の洋服に適した社会変化を求める長谷川如是閑／関東大震災が女性の洋装化に影響を与えたという根拠のない神話／洋装化が促進したのは関東大震災が要因ではない／関東大震災の教訓を強調する棚橋源太郎／高等女学校の生徒たちは卒業すると和服を着た
未成年者に成果をあげた服装改善運動【この時代の服装発展段階論の見方④】

第五章　昭和モダニズムの服装

モダンガールとモダンボーイの登場／女子生徒とモダンガールとの違い／スカートから出る肌色の脚／淡谷のり子のモダンガール体験記／職業婦人の洋服／洋裁学校の誕生①―ドレスメーカー女学院―／洋裁学校の誕生②　―文化服装学院―／ミシンの普及／白木屋火災が女性の下着を普及させたという神話／白木屋火災の神話にお墨付きを与える服飾史研究者／今和次郎の考現学調査／人気作家の婦人服装座談会／女性の洋服の限界と未来性／男性の洋装の流行変化／『婦人之友』の洋服着用調査／子供服から和服が消えていく／高女を卒業して洋服を着る／通学時以外の和服姿を嘆く市川源三／洋服は高嶺の花、根強い和服の人気／東京と銀座の職業婦人の服装／成人女性から消えない和服女性の二重生活の始まり【この時代の服装発展段階論の見方⑤】

第六章　国家総力戦と服装

大礼服制の停止／銃後の主婦はたすきがけ／時局に影響されないファッション／映画に見る和服と洋服／伸び悩む洋装化／七・七禁令後も『三越』カタログでは和服が売れ筋／女性の服装生活調査／一般社会への洋服普及の意識変化／国民服の誕生／和裁家と洋裁家がせめぎ合う婦人標準服／伊東茂平の活動から見る戦後への連続性／内閣情報局が黙

視する女性の洋服／衣料切符を「大事に使うも国の為」／普及しない婦人標準服／消えないスカート姿／消えない長袖の着流し姿／ゲートルを巻き、モンペを穿く生徒たち／モンペの普及と評判／モンペやズボンは生き抜くための「決戦服」／国家存亡の危機がもとめる「日本的」な「洋服」

戦争と女性の洋装【この時代の服装発展段階論の見方⑥】

第七章 洋服を着る時代の到来

「洋裁ブーム」は戦前からの断続性／戦後に徐々に洋装化が広がる理由／洋裁学校の黄金時代／三つ巴の洋装姿／農村にも広がる女性の洋服姿／ナイロンやポリエステルなど合成繊維技術の発展／婦人既製服の発展／下着革命の影響／下駄から靴へ／ミニスカートの流行と定着／女性も穿くジーンズ／高級な和服は貸衣装／マンガに見る日常生活から消えていく着物／映画に見る日常生活から消えていく着物／歌謡曲に見る日常生活から消えていく着物／需要と供給の統計変化

男女ともに着物を着なくなる【この時代の服装発展段階論の見方⑦】

終章 282
あとがき 288
注記 293
参考文献 305
服飾関連用語 315

引用史料などには、読みやすさを考慮して適宜、振り仮名や句読点を補った。
引用史料中に、現在では不適切な表現が含まれているが、史料的価値に鑑みてそのまま掲載した。

序章

明治五年（一八七二）十一月十二日に洋式の文官大礼服が制定された。国家の官僚が従来の衣冠や狩衣といった日本古来の装束ではなく、西洋の王室で用いられているのと同じような礼服へと改めた。世界に対して日本の礼服は、和服から洋服へと変更したことを告げた日となった。したがって、昭和四年（一九二九）に現在の東京都洋服商工協同組合、同四七年に全日本洋服協同組合連合会が、それぞれ十一月十二日を「洋服記念日」と制定した。令和四年（二〇二二）は、日本で洋服が誕生してから一五〇年という記念の年にあたる。

読者の皆さんは、日本人がどのようにして洋服を着るようになったか、ご存知であろうか。幕末にアメリカからペリーが来航して開国することになったとか、文明開化によって外国の文化が入ってきたからとか、不平等条約を感じて欧化政策が展開されたからとか、関東大震災に

よる教訓だとか、アジア・太平洋戦争が終わってアメリカの文化が入ってきたからだとか、色々と頭のなかで理由を考えるのではないか。

男性と女性の洋装化がはじまるきっかけについては、拙著『洋服・散髪・脱刀』で詳述した。しかし、その後の発展段階論については課題として残された。女性の服装史の古典的研究としては、村上信彦（むらかみのぶひこ）『服装の歴史』が挙げられる。村上氏の研究の特徴は、男性に比べて女性の社会的地位は低く置かれたとし、服装史の流れからその性差別の格差を指摘するという論法である。

この考え方で女性の洋装史の発展段階論を捉えると、最初から女性の洋服姿は女性の社会進出および男女平等という落としどころが自明となり、それに向かって洋装化が進行していくという結論しか見えなくなってしまう。また村上氏は、唯物史観にもとづいて論理展開していくため、史実と異なる点が少なくない。非常に鋭い分析視角を持つものの、実証性を欠いている。

もう一つの古典的な研究として、中山千代（なかやまちよ）『日本婦人洋装史』が挙げられる。日本史の研究手法にもとづき、ドレスメーカーの展開に関する調査などを実証的に行っている。しかし、ただその時期の服装に関する史料を取り上げながら解説しているに過ぎず、発展段階論については書かれていない。家政学の服飾史研究者による服装史の多くが、中山の研究を踏襲している。もっとも、検討対象が限定された微視的な研究がほとんどであり、幕末から昭和戦後期までの

発展段階論のような巨視的な研究は見られない。

それどころか、家政学の服飾史研究者が書いた書籍や論文のなかには、「虚像」が混ざっているのである。歴史の「虚像」を「実像」のように描くほどおそろしいものはない。例えば、日本の女性の洋装化に影響を与えたのは、大正十二年（一九二三）九月一日の関東大震災であると書いてあるのだが、一方で昭和七年（一九三二）十二月十六日の白木屋百貨店の火災によって女性は下着（パンツ）を穿くようになったと書いているものも少なくない。

勘が鋭い人にはおわかりだろう。もしも関東大震災で洋服に目覚めて、和服を着なくなったとすれば、一〇年も経った白木屋火災で和服を着ていたせいで死者が生まれるのだろうか。また本当に白木屋火災が教訓となって下着を穿くようになったのだろうか。[*1] まったく実証されていないし、この両者の関係性を見ても、大正期から昭和戦前期の洋装化の発展段階論を理解することはできない。家政学の服飾史研究者の服装史は、その理由や時代背景について、実証に拠ることなく、思いつきで書いてあり、最近では一般に流布している曖昧なネット情報に便乗して説明するものもあるくらいだ。

こうした根拠のない服飾史を知らずに読んでいると、「虚像」を「実像」として理解してしまう危険性があるのだ。本書では、幕末から昭和五〇年代までを検討対象とし、どのようにして洋服が増え、和服が減っていったのか、洋装化の発展段階論を提示する。各時代の洋装化の

意味や位置づけを丁寧に行って理解しなければ、日本人の洋装化の歴史は見えてこない。これまで存在しなかった実証性と理論性とを兼ね備えた洋装化の歴史を描いてみたい。

もっとも、男性の洋装化は明治二〇年前後に方向性が定まるため、本書の八割は女性の洋装化に頁を割いている。明治時代に洋服姿の女性は奇異な目で見られたが、現在では和服姿の女性を見かけることが珍しくなった。ここまで服装観が変化した洋服の歴史について述べることとする。

第一章　幕末の海外渡航と洋服との出会い

洋服は鬼や悪魔が着るもの

日本人で最初に洋服を着た人物は、土佐高知藩の漁民中浜万次郎、同伝蔵、同五右衛門らといわれている。天保十二年（一八四一）一月に足摺岬沖で鯵鯖漁に出航したが、強風によって遭難し、伊豆諸島の鳥島に漂着する。植物採取に鳥島に寄ったアメリカの捕鯨船ジョン・ハウランド号によって救助され、ハワイを経て万次郎はアメリカへ向かう。

弘化三年（一八四六）に万次郎は、伝蔵と五右衛門に再会し、嘉永四年（一八五一）に三者は日本へ帰国する。三者は長崎奉行から尋問を受け、所持品の検査を受けた。このとき万次郎の所持品として「木綿筒袖襦袢」「天鵞絨木綿刷合胴着」、伝蔵と五右衛門の所持品として「羅紗筒袖着物」「毛織羅紗筒袖着物」が記されている。[*1] それぞれ外国で入手したもので、洋服であることに間違いない。

彼らと同じような体験をしたのが、播磨国（現在の兵庫県）で廻船業を営む家に生まれた浜田彦蔵である。嘉永四年一〇月、浜田が乗った栄力丸は紀伊半島の大王岬沖で難破し、十二月に南鳥島付近でアメリカの商船オークランド号によって救助される。この船中で浜田は航海士からフランネルのシャツと羅紗のズボンを貰っている。浜田は「からだがひどく窮屈なように感じた。でも洋服は自分の着物よりはるかに暖かだったし、そのうえ仕事をするのに便利だった」という。[*2]

着物から洋服に着替えた翌日には、航海士によって髷を切り落とされてしまう。浜田は「私の心は悲しみに突きおとされた」と回想し、また不浄と考えられていた「四つ足の肉」を食べてしまったことを悲しんでもいる。だが、すべては「郷に入ったら郷に従えだ」と諦めるしかなかった。[*3]

嘉永五年二月にサンフランシスコに到着すると、新しい洋服とともに靴を買い与えられている。浜田は町中で洋服を着て歩くアメリカ人を見て「黒い顔、白い歯、それに大きい赤い唇は、煤にまみれたような顔と対称をなしていて、おそろしくてぞっとするほどであった」と感じ、まさに「『鬼』（悪魔）にちがいない」と述べている。[*4]

洋服を着た外国人は「鬼」であり、浜田は鬼ヶ島の地から故郷に生きて戻れるか、神に祈願する思いであった。事実、浜田は無事に帰ったら、神に自分の髷を切って奉納するつもりでいた。「鬼」や「悪魔」と感じる外国人たちと同じような洋服を着てみたい、または散髪を行ってみたいと思う日本人は、この時代いなかっただろう。

幕府の遣米使節団

嘉永六年五月にペリーが来航し、翌七年三月三日に幕府はアメリカと日米和親条約を締結した。そして安政五年（一八五八）六月十九日には日米修好通商条約を締結した。批准書の交換

図1　ワシントン海軍工廠における万延元年遣米使節

はワシントンで行うため、幕府は正使新見正興、副使村垣範正など十二名の使節団を派遣することとした。安政七年正月十八日（三月に万延〔一八六〇〕と改元）、使節団は品川沖でアメリカの軍艦ポーハタン号に乗り、二二日に横浜を出発した。

この航海には幕府の軍艦である咸臨丸も随伴艦を務めた。咸臨丸には勝安芳（海舟）、福沢諭吉、赤松則良のほか、通訳として中浜万次郎も乗船していた。この使節団の服装は、「皆割羽織を着て小袴或は断着を穿いて大小を帯した。身分に高下はあるが皆同じもので、頭は野郎頭、医者は坊主頭」であった。*5

ワシントン海軍工廠で撮影された六名の使節団代表たちが座っている写真からは、全員が月代を剃った髷を結い、着物に羽織袴を着け、腰には大小の日本刀を差しているのがわかる。

幕府の遣蘭留学生

文久二年（一八六二）三月、幕府は海軍技術の習得を目的としてオランダに留学生を派遣することを決定した。留学生には榎本武揚、赤松則良、沢太郎左衛門など七名、海軍研究のため津田真一郎（真道）と西周、医者として伊東玄伯と林紀（研海）が随行した。

出発時の服装は「紋付筒袖の打裂羽織に裁付袴、大小を帯びて草履」を履き、「被物には菅笠又は桐油紙の頭巾」「麻裃を持つて行く人も」いた。[*6] 文久二年六月十八日に品川を出発し、下田、長崎を経て、オランダに向かった。

船中で草履を履いていると雨の日は困るため、十一月三日にバタビア（現・ジャカルタ）を出発するときには靴に履き替えている。文久二年二月八日にセントヘレナ島のジェームズタウンに寄港したときには、「羽織袴に両刀を帯び草履穿きでメイン・ストリートを歩いたが、老幼男女は我々を観ようといふので群つて来るので五月蠅い程であつた」という。[*7] 彼らの服装を珍しいと思って外国人が集まってくる。

この現象は文久三年四月十六日にオランダに到着してからも変わらなかった。「私たちは例の通り黒紋付羅紗の羽織に裁付袴で両刀を佩び髷を結つて帽子も冠らない純然たる日本の扮装であつたから、彼の国人には誠に珍らしい異国人として好い見物であつた」。[*8] それでも積極的に洋服や帽子に替えようとはしていない。

その理由としては、日本を出発するとき幕府に提出した誓詞に「御国風を守る」という文面があったからだ。しかし、オランダに到着してから「至る所見物の群衆に囲繞され、旅館に居を定めた後も市街へ出れば必ず見物人に難まされ、常に警察官の保護を受けなければ買物も容易ではなく、当分は市民の目標となつてゐた」。幕府の誓約に背くものの、国内と状況が異なるため、外国では洋服に着替えたいと思っていたようである。[*9]

オランダでは珍しい服装のため、現地で知り合った国会議員や大学教授などから接待を受けるときには、日本の服装で来てほしいと望まれることが多かった。そのなかで海軍卿カッテンディーケは服装を改めることを忠告した。この忠告を受けて留学生たちは洋服を着るようになった。

慶応四年の海外渡航

慶応三年（一八六七）十二月九日、幕府が廃され、天皇を中心とした新政府が発足した。このとき赤松則良や渋沢栄一は欧州に滞在していた。赤松が帰国するのと、入れ違いで渡欧したのが、公家の三条公恭と、彼の従者尾崎三良たちであった。彼らは慶応四年三月上旬、イギリス船に乗って神戸を出発し、下関、長崎、上海を経由してイギリスに向かった。

尾崎によれば、長崎に着いたとき「皆日本服に大小を帯し、頭髪も亦従来の如くちょんまげ

に結びたり。予は一人先づ髪を切り散髪したり」という。[*10] 全員が羽織袴に大小の刀を帯び、三条は公家特有の月代を剃らない髷を結い、尾崎だけが散髪であった。

長崎府判事井上馨は、この姿を見て「君等の衣服では船中及び途中所々立寄るに甚だ不便なり、此にて洋服を造るべし」と指摘し、洋服仕立師を呼び、すぐに羅紗の洋服を一着ずつ作らせた。また井上は、「長き物を横へて居ては邪魔になるから其大小を置いて行くべし」とも助言している。「大小は武士の魂と云ふ思想の盛んなる時なり。但し西洋人より見れば頗る異様に感じた」からであった。[*11] 洋行経験の先輩として、現地では日本の服装がおかしく見られるから洋服を着用し、大小の日本刀は長崎に置いて行けというのである。

尾崎たちは洋服を着ることは納得したものの、「日本武士の魂は仮令何れの国へ行くも之を離すべからず」と主張し、「大小は各々剣つりを肩より掛け之を携帯」した。[*12] 三条は公家だから「武士の魂」など持っていないはずだが、家来の尾崎たちと同じように刀を捨てることができなかったのは面白い。

長崎で井上の斡旋で仕立てた洋服に袖を通したのも、異国の地で自分たちの姿をカモフラージュするためであった。だが、慶応四年閏四月二九日にイギリスのサウサンプトンに到着すると、すぐに不都合な目に遭っている。

「長崎にて作りし洋服は何分無さいくにて、之を着しては迚も外出は出来ぬと云ふので、

羽織袴にちょんまげ、大小を横たへ、馬車にて所々見物に出掛け、公園にて馬車より下り歩行したる所、沢山の人民黒山の如く周囲に集り、異装を見んとて喧争し自由に歩することも出来ず。殆んど困却し早々ホテルへ帰り、急に散髪し洋服を新製し、全く洋人に摸してからは余り目を付けるものもなかりし。」[*13]

長崎で仕立てた洋服はイギリスでは見劣りしたため、羽織袴に二刀を差し、「ちょんまげ」を結って外出したところ、「異装」を見ようとする現地人に囲まれ、自由に歩くこともできないという、幕末に海外渡航した先輩たちと同じ体験をしている。そこで尾崎を除くメンバーも全員散髪をし、洋服を新調してからは目立つことがなくなったという。

外国と戦うための軍服

洋式調練の事始め

日本の洋式軍服は、天保十二年五月九日に高島秋帆が武蔵国徳丸ヶ原（現・東京都板橋区高島平）で行った軍事演習の参加者が着た服装に始まる。「高島四郎太夫砲術稽古業見分之図」によれば、第一隊長秋帆、第二隊長高島浅五郎は、鉄砲の操作の邪魔にならない黒漆塗りの「小陣笠」（トンキョ笠）を被り、桃色の「筒袖」に浅黄色の「裁着」、紺色の脚絆に陣太刀を佩き、

図2　采配を手にしているのが高島秋帆（「高島四郎太夫砲術稽古業見分之図」板橋区立郷土資料館所蔵）

采配を手にしている。隊員たちは「小陣笠」「筒袖」「股引」「脚絆」「足袋」「草履」という軽装であった。

この演習を見聞した御鉄砲方井上佐太夫からは、「異体之服笠」などを使ってオランダ語で指揮を行ったことは心得違いだとの意見が出た。これに対して「金令山人」という仮名で、軍事調練には小型の陣笠や「筒袖」でなくては動作が不自由であり、山の猟師たちは「袖細き服」を着ており、外国人の服装に倣ったものではないとの反論が寄せられている。

幕府も洋式調練の必要性を認め、天保十三年六月には高島に誰にでも伝授してよいとの許可を出した。だが、「異様の冠物、衣服等相用いず、常体の笠、或は陣笠、野服、小袴、陣羽織等」で稽古するように指示している。[*14]「小陣笠」や洋服に類似した「筒袖」には警戒したのである。

洋装の日本史
刑部芳則・著

発　行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定　価：1,089円 (10％税込)
発売日：2022 年 12 月 7 日
ＩＳＢＮ：978-4-7976-8112-3

ネット書店でのご予約･ご注文は こちらにどうぞ！